

鳥羽の江戸川乱歩館復活に向けた

動きについて

小松 史生子

二〇二一年十月二十五日、当方の許へ一報が入った。当日の『読売新聞オンライン』は、「24日午後11時45分頃、三重県鳥羽市鳥羽、鉄骨3階建てビル付近から出火、ビルや周辺の文化施設『江戸川乱歩館』、居酒屋など計7棟を焼いた。」という見出しで速報した。翌二十六日付『毎日新聞』三重版では、「貴重な宝が一夜で…」江戸川乱歩館、火事で未整理資料など焼失」として、より詳しく報道している。これらの報道に見るとおり、鳥羽の民俗学者・岩田準一の生家は全焼し、屋内に収蔵されていた貴重な資料は一部を残して焼失してしまったのである。筆者は江戸川乱歩館を委託管理していた鳥羽商工会議所に連絡して十月三十一日に現地入りし、岩田家のご遺族や乱歩館の関係者の方々と一緒に現場検証をさせていただいたが、その惨状には呆然とするほかなかった。母屋の屋根はまったく焼け落ち、柱と壁の一部のみかろうじて残っていたが、建物の復元はも

はや考えられない状況という有様。母屋の二階の金庫および裏手にあった土蔵にまでは火が回らず、そちらに収めていた資料は無事であったが、喪われた資料を思うと胸が塞いだ。幸い、筆者は科研費による共同プロジェクトの一環として、二〇二〇年十二月から乱歩館の母屋一階の資料群をデジタル撮影してアーカイヴ化する作業をしていたので、現物は焼失してもデジタル画像是残されている。この時ほどデジタル・アーカイヴの作業をしておいてよかったと思ったことはない。同時に、全国にある貴重な文献資料も、いつ何時このような火災等に見舞われなくても限らないと感じ、改めて資料のデジタル・データ化およびアーカイヴ事業の急務について考えさせられた。

以降は、地元ボランティアの方々と鳥羽市文化財専門員・野村史隆氏、また中世文学研究者・辻晶子氏、および岩田準一研究者・森永香代氏、そして近代文学研究者である筆者によって応急処置を施しながら整理分類し、改めてPCでリストを一から作成する作業が開始された。研究者連はおよそ十日から二週間おきに鳥羽を訪れ、損なわれた資料の補修作業にあたった。焼け跡の資料の中からは、岩田準一の全身像が映ったガラス乾板といった珍しいものや挿絵の下絵、岩田による乱歩の似顔絵が描きつけられたスケッチブック、スクラップ帳が続々と現れ、また救い出された金庫の中からは与謝野鉄幹・晶子の書簡三十一通が発見されたが、それらを分析する前に、ともかくも水浸しになった紙を乾かす作業や、焼け焦げた紙を注意深く補修する作業を優先しないといけない。こうした現場作業を通して改めて学ぶことは甚だ多く、文学研究者としての社会貢献のあり方についても考えさせられた。

一方、十一月十日に商工会議所を中心に今後の運営に関する方針が審議され、二〇二三年春には焼失した母屋に隣接する空き家を改装して江戸川乱歩館をリニューアル・オープンし、次いで岩田準一記念館のオープンも目指すという前向きな方針が決定されたのは喜ばしいことであった。この方針に基づき、商工会議所や市の文化財専門員と、筆者を含めた文学研究者連とが連携・協力して、資料の整理保存そして解説を進める作業を推進することとなる。火災から始まって、これらの過程がニュースで逐一報道されるに伴い、全国の江戸川乱歩ファンやミステリ研究者・団体、また岩田準一と交流があった南方熊楠を研究する方々から支援の申し出があったことも明記しておきたい。立教大学大衆文化研究センターは「Twitter」でこの件に触れ、日本推理作家協会や『新青年』研究会といったミステリ関係団体、また二〇二〇年十月に江戸川乱歩旧宅跡記念碑を建立した名古屋の関係者団体からも心配する声が寄せられたことで、鳥羽の江戸川乱歩館は全国から注目を浴びた。のみならず、文献資料の保存・補修に日頃から多大な関心を持つアカデミズム方面からも今後の作業の展開が注視される事態となり、文学館・記念館といった施設が置かれている状況について再考する得難い機会ともなったのである。年が明けて二〇二二年一月中旬、愛

知県犬山市の博物館明治村が筆者の研究室を訪問。この年からスタートする明治村の謎解きアトラクションに江戸川乱歩を企画する件についての相談であったが、鳥羽乱歩館にも話題が及び、結果、明治村内の千早赤坂小学校講堂で鳥羽乱歩館復建への寄付金を募る展示会開催が急遽決定し、金城学院大学の筆者のゼミ生達が乱歩作品の梗概を二十代の若者視点でまとめるパネルを作成することになる。この『犯人は誰だ?』謎解きの誕生(明治・大正の探偵小説から江戸川乱歩まで)(二〇二二年三月二十六日～六月二十六日)と題した展示会は、学生が作成したパネルの他、乱歩が暮らしていた一八九七年～一九二二年の名古屋市街図等の一次資料、乱歩が読んでいた当時に流行した探偵小説本や海外小説の原本等も豊富に展示され、話題を呼んだ。展示会の模様は、「メイジノオト」HPでレポートが閲覧できる(https://www.meijimura.com/meiji-note/post/exhibition_edogawarampo/)。集まった寄付金は展示会終了後に明治村から鳥羽商工会議所に贈られ、その一部始終がテレビその他のメディアで放送された。

五月十五日、岩田準一の令孫・岩田

光正氏宅に保存されていた資料についての連絡が、筆者の許にもたらされる。この中には、今まで目の目を見なかった岩田準一晩年の入院過程を示すメモ類、乱歩や稲垣足穂、与謝野鉄幹・晶子からの未整理な書簡、その他にも著名な文人達との交信を示す貴重な資料が大量に含まれていた。早速各地の文学研究者に協力をあおぎ、八月十七日(二十日)にかけて総勢九名(井川理・乾英治郎・柿原和宏・川崎賢子・小松史生子・鈴木優作・丹羽みさと・松田祥平・森永香代)のチームが結成され、鳥羽で合宿を張り、三泊四日間集中してこれら資料のリスト作成作業にあたった。参加メンバーは東京・埼玉・名古屋・熊本から集まり、未整理の山から貴重な資料が発見されるたびに感動の声を上げながら、全力集中して大小それぞれ二十一もの箱や袋に入った未整理資料と取り組み、エクセルで一覧表に入力し商工会議所と岩田家に納めた。後々、この一覧表が公開されて、江戸川乱歩および岩田準一の研究に資することを願うものである。同時に、この合宿にはベテランから若手にわたる各世代が参加したこともあり、特に若手研究者にとっては歴史的な価値のある一次資料の現物を直に扱える良い

機会にもなった。

十月には被災から一年ということもあり、NHK津局をはじめ、中日新聞や朝日新聞からの取材も多くなった。さらに、二〇二三年は江戸川乱歩が作家デビューして百年という記念の年に当たるということで、平凡社が『別冊太陽』で乱歩の特集を組むことを決定。その特集内で乱歩の鳥羽造船所時代を取材する企画が持ち上がり、編集者とカメラマンが筆者同行で十月三十一日に来鳥した。乱歩夫人・村山隆の故郷である坂手島にも渡航し、現地踏査を行った。また、二十年前から発刊が計画されていた岩田準一の日記についても、岩田準一の子息である故岩田貞雄氏の意思を継ぎ、その刊行を目指して鳥羽在の椎木眞夏氏による研究が進んでいる現状である。

新・江戸川乱歩館は、二〇二三年春(GW前)に開館が予定されている。それに先立つ四月二十二日には、開館を祝するフォーラムも企画されている。思えば、突然の全焼という災害に見舞われた小規模の私立文学館が、わずか一年余りで数々の新発見資料を掘り起こしてリニューアル・オープンまで漕ぎつけたのは、奇跡に近いと言えるのではなからうか。この一年余り、

筆者は地元の文学・文化財を守ろうとする鳥羽の関係者連の熱意に心から感動すること、頻りであった。被災はまことに残念な事態ではあったが、それを機に文学研究者と地元の研究者・愛好者、そして行政が、互いの持てるツールや能力を提供しあって資料を守り抜くというプロジェクトが実践できたことになる。昨今、人文系の学問の価値が過小評価される傾向が多々みられる日本の世情である。鳥羽の江戸川乱歩館再建の過程が、人文系研究に携わる多くの人々を励まし、その土地の文学・文化を保存する施設の今後を前向きに、より発展的に再検討する事態に貢献できるなら、これ以上の喜びはない。

(金城学院大学教授)



ガレージ内に収蔵された資料群
(2021年10月31日 小松撮影)